新しき思ひも湧くか佗助の白き花落つ庭をし見れば

わが嘆き遂に詮なしこのいまの現つに生きむこころ定めて

筒咲きの佗助の蕾ひとつありて先尖れるが残りてゐたり

落ち落ちて佗助の花終はるらし居間よりは見つひとつ蕾を

わがいのち幾許ありやここに来て遂のいのちをかなしみにけり

午前四時われの恐怖の往き還る険しきさまに寝返りを打つ

瞑想をいまは為すべきときならむ為すべきことを為し得ずてあり

かくもわがこころ浅きをかなしまむ人生は「年」の長短に非ず

わが妻と我とわが居てこころ安しこれにてよしと思ひて眠る

三月二十一日夕　雨となる

ジャスコにて肌着類買う、地域振興券使う

妻と来てこころ安けしあれこれと選びし肌着取り揃へ持つ

何時よりか白く小さきコップありて杜仲茶を飲むテーブルの上

六四の熱湯割りの薩摩白波われは好みて幾年ならむ

幾年をわれの好める白波の今日は苦しも高清水飲む

折々のうた

ここ数日、原稿纏めに精出しおれば折々の歌　　三月二十七日〜三十日

雨に濡るる庭石のなか赤石の小さきが立つ汝(なれ)は「女人観世音」

雨に濡れし庭石たちのそれぞれの群青(ぐんじょう)のいろは涙ぐましも

わが歌の原稿深く錐に刺し紙縒(こよ)りに綴(つづ)る今日の午前を

今日の日の午前をわれの原稿の紙縒(こよ)り綴(と)じするたのしさにありき

わが紙縒り始め通りて次の穴紙縒(こよ)り弱きになかなか通らず

前方墳小塚古墳を上(のぼ)りゐて孫の直人と凧揚げし日よ

三つ猿の碑の古きかな寶永の年号なれば三百年を経し

北空の低くも横に拡ごりて明るみゐたり白き山みゆ

夕べ再び古墳に来りて　　三月三十日夕

雷神山古墳ひむがしの順路より上りてゆけりこころ安けく

雷神山古墳ひむがしの四阿(あずまや)の外柵に倚りわが街眺む

この夕べ雷神山古墳静けくて四方(よも)眺めては歸らむとせり

吾妻の四国岬巡り四泊五日の旅に出でゆきて淋しければ　三月二十九日～四月二日

妻旅に出でゆきし後の独り酒終りては夜の虚しさにあり

いまよりはゐ寝て忘るることのみがわが最良の安らぎならむ

ひとひとり生くるは難しわれなくて妻は如何にし生きんとすらむ

梶川先生

われ数年の以前より冬季、背中の湿疹ひどし、長町の皮膚科梶川先生に年一回の薬貰ひにゆきければ。

虫眼鏡取りて背中を診たまへり呪文は長しその医学語は

幾度となく口つきて出づ呪文はや「カルテ」書く間も唱へらるるなり

唱へ給ふ呪文のごとき医学語のまこと不可思議なる診察なり

涌沢先生

われ昭和五十五年、緑内障を患ひ「わくさわ眼科」にて手術せり。新しき病院の手術第一号患者にてありき。

思はぬに涌沢先生申さるる「わが息子はや十八才の大学生なりと」

しみじみと十八年のとしつきの過ぎては老いぬこと申されし

しみじみときみもわれもともに老いしこと言ひ給ふ涙ぐましも

わが眼(まなこ)「わくさわ眼科」に行きてはや十八年となりにけるかも

「死に方の流儀」なるもの

斎藤茂吉が二男、宗吉は作家北杜夫なり。最近愈々老いて死にたき由なり「文芸春秋四月特別号」に載せられし「死に方の流儀」なる対談興味深し。

朝のテレビ葬儀費用のことありて遺体冷凍の氷代映る

遺体冷凍の氷代計算すこの人の世をかなしみにけり

通夜なし葬儀なしと言ふ「死に方の流儀」なるもの諾(うべな)ひており

敬愛す北杜夫らが提唱する「死に方の流儀」に従はむかな

ひと死して虚(むな)しきものをなにゆゑの三百万の葬儀費用ぞ

七福神の面

妻が旅の土産に七福神の鈴の面ありしをわれの「骸骨」と言へるが可笑しとて孫の直人の笑ひ止まずければ

四月二日夕

七福神の鈴の面「骸骨」なるが可笑しとて孫の直人は笑ひ止まらず

「骸骨」と言ひたるが可笑しとて笑ひ止まずけり孫の直人は

妻が土産ままかり酢漬ひとつふたつ酒の肴に幾日か経ぬる

薬師堂古墳　四月十日夕　雨

雨となる四月十日の夕暮るる頃はも行けり薬師堂古墳

来りてはいつも散歩に誘ひたる直人が好む通ひ路なりき

急峻の石のきざはし手繋ぎて幾度上りしかその日思ほゆ

み社の鈴を鳴らして拝みしがはや駆け登る祠頂き

頂きの祠が辺り松かさをわが帽に入れ遊びたりしか

集めたる松かさわれのいとほしみしまらくは玄関の篭に入れ居り

四月十日そぼ降る雨に立ちませる「奉献薬師瑠璃光如来」がおん幟なり

雨に濡るるおん幟をぞきざはしを上りつつひとり顧みにけり

わが孫たち

わが孫の真輝が耳の福耳の耳朶撫でてゐたりけるかも

孫の佑平が「作務衣」呉れしにより

勤め始めし十八歳のわが孫の贈り呉れたる「作務衣」ぞこれは

働きて我を忘れず贈り呉れし作務衣の紺をいとほしみけり

ブランコの今野直人君

直人君来りてはすぐ「爺ちゃん散歩に行こう散歩に行こう」と言ふが常なりき

わが孫の今野直人のブランコに乗りたるときにお話しをする

いろいろと空想しては語り継ぐ今野直人のお話しを聞く

「流れ観音」の社前にありしブランコに今野直人は語り止まずけり

孫として自転車を漕ぎ来りける「流れ観音」や一年は過ぎぬ

揺られてはお話し語りいくつかを挙げては問ひぬそのひとつのお話し

境内のブランコに乗り揺られつつ直人は三つのお話しをせり

いろいろのお話し終へて直人君「おしまい」と言ひて笑みたりしかな

かかる日も遂に無けむか寂しみて遊びにし日々思ひ出つも　七月三十日夕

流れ観世音

江合川流る部落の「かみぞね」に流れ着き給ふ観音像は
この部落流れ着きたる観音のみ像を祀るみ社の在り
み社に観音像は在りまして「流れ観音」と称(とな)へ奉る
み社の朱(あけ)の門にぞ掲げらる「流れ観世音」が扁額(へんがく)仰ぐ

補遺

鉄棒に倚る

丘の上の祠のうへを吹く風の寒きに戻り鉄棒に倚る
丘のうへの祠に祈り松木立このまをゆけば風の涼しさ
日の巡りゆたけきものかこの朝を日蔭をつくる鉄棒に倚る
黄の百合の花も終りて萎めるがあはれ石のうへ梅雨に濡れゐし

今野精治氏を悼む

五月七日田植えせしより十日余り日を経ぬに何ぞ君は逝きしか
糯米の苗を植えては昼飯(ひるいひ)を食(を)すと云ふ縁側に君は居ませず

合歓の花

八月の三日に合歓の花見てしわが歌はありて十年余り過ぐ

七月の半ばなれるも合歓の花そのくれなゐのいろは褪せゐし

わが巡る祠坂下崖間のねむの大木に花咲きにけり

ねむの花早くも咲きて七月の初旬となれり日の移ろひよ

合歓の木の花の盛りて花、花、花のうすくれなゐの耀ひにあり

花々のひとつひとつの芯のはや競ひ立ちては全きとなる

耀へるひとつ花芯のありて咲き咲き揃ふときひとつくれなゐ

合歓の木の枝のびのびとたひらけく葉をひろげたるすがたうれしむ

十年の月日はながれ温暖のこの世に合歓のはやく花付け

月山登山に吾妻はゆきて　七月十九日

梅雨の晴れ間七月十七日吾が妻は月山登拝の証し戴く

月山の如何に険々しき山なるか吾妻は語り飽かずてありき

三山のひとつ湯殿山に購ひし日本手拭五つのありき

ひとつひとつ違(たが)ひてありぬ湯殿山の日本手拭面白きかな

五つある日本手拭擴げては暫くも側の畳に置きぬ

薄墨のまめ絞りある日本手拭出羽三山の文字も良けむか

墓掃除　七月二十九日午前

汗流れ吾妻(あづま)と墓に草を取る崖の刈り草縄に束ねし

崖下に刈りたる草の積み捨てしあるを吾妻は蔦蔓(つたづる)に結ぶ

蔦蔓と縄の二本に結びては妻の運べる重くはあらむ

妻の書く立札持ちて崖上り中腹に挿す「この下にゴミ捨てないで下さい」

梅雨明けて十日は暑しと妻の言ふこの日も暑しただし風あり

墓縁(はかべり)の日蔭に倚れば風の来て涼しくもあるかレモン水飲む

梅雨明けて十日(とおか)余り暑き日は続き七月二十九日夕べ雨降る

十日余り暑き日続き葉の萎へしなすび胡瓜に運ぶ水遣る　同日なりこの夕べ雨なり

朝顔

わが庭の居間より見ゆるところにぞ吾妻は据えぬ朝顔の鉢　八月九日朝

竹をもて土に差しける朝顔の鉢より伸ぶる竹の長さよ

鉢が側辺(わきへ)竹差せば蔓の伸びゆきて朝な朝なにわが見つるかな

朝顔の花付けたりと妻の言ふわれの裸足で庭に降りけり

丈高き竹に巻き付く伸ぶる葉の半ば下にぞ今朝は花付け

花付けしひとつ朝顔濃き紅(べに)の花片(はなびら)に走る白き線はや

吾妻の富士登山ゆきを果たしければ　八月十九日

富士登山八角棒の焼き印の一九八四の数字みつむる

一九八四年長男淳夫の富士登山の写真思ひ出でて

富士登山八角棒に日章旗結び振り持つ児らし偲ばゆ

富士登山十五年を経て妻のぼる焼き印は濃し一九九九

焼き印の一九九九の歌ありてわれの歌稿も終りとせむか

先の焼き印の歌をもって一応は区切りとしたかったが
なお、未練をもちて暫く歌稿を続けることとなる。

厨辺の南瓜　八月三十日

畑より取りたる南瓜四つありて厨辺(くりやべ)の床に四角にならぶ

南瓜四つ如何にも大きく四角形に置かれてあれば暫し眺めき

厨辺の夜の暗きに躓(つまず)けば南瓜ひとつの転がりゆけり

朝顔　その二　九月三日

縁先の朝顔の鉢に差し添へし竹に蔓巻き一間を越ゆ

竹の尖(さき)なほ上向きて六寸余(ま)り朝顔蔓(あさがほつるて)手風に揺るるも

朝なさなあさがほのはな高みにぞのぼりて咲けりその日々おもほゆ

朝顔の薄らはなびら開きては朝な朝なに近寄りにけり

朝顔の薄ら花びら吹く風に揺れてゐるときこの盛りはや

朝顔の花びらにある白き筋(すじ)いくつと数ふ日もありたるか

あさがほは薄らに清き花と思(も)ふ短くも咲きはや萎みたり

あさがほは薄らに清き花と思(も)ふひとつはなびら萎むをみれば

朝顔のたねかたくなり枯れ枯るる眼下(まなした)にひとつ小さき花付け

朝顔の支へ竹抜き縁側の敷石台にたね打ち落とす

大根の種

大事なることと手帖に記しおり九月四日二回目の大根の種蒔きしこと

大根の種の芽吹きてありなむか九月七日の午前をゆけり

枯れ草の日避(ひよ)け除けば大根の若芽ひとならび可愛ゆくみゆる

今日来てはさきに蒔きたる大根の若葉の並び先ずは眼につく

午後よりは雨ふると云ふ然れども如雨露(じようろ)をもちて水かけゆくも

午後よりの雨の降らずて曇り日の夕べとなりぬ明日は如何(いか)ならむ

日光の旅　九月十日〜十一日

いろは坂かくも険しき坂道とわれは知らずて来たりけるかな

いろは坂まがりきるとき四十八文字の坂道あるとこそ聞け

いろは坂「い」より始まる曲り角「いぬもあるけばぼうにあたる」

いろは坂ときどきにしてガイド言ふ「いろはかるた」のなつかしきかな

いろは坂くねくねのぼりまがるときかるた文字あり確かむるわれは

いろは坂いまはくだりぬをはりなる「ん」の字われは見落としにけり

戦場が原の渡り踏み板たどりゆきまなかひにみる男体山はや

戦場ヶ原の草原となりゆくを聞きても見つるずみの並木を

ずみの木の梅の木に似て白き花さきそろふこと聞きてゐたりき

湧き出づる湯の混り合ふ中禅寺湖に魚住みたるは明治とぞ云ふ

中禅寺湖ふたつの不思議ありと云ふ水の凍らずひと浮かび来ず

エスカレーター一〇〇米を下りゆき滝の底ひに降り立ちにけり

ここにして巌頭の辭はありたるか「大いなる悲観また楽観」のことも

華厳の滝みおさめてより売店に猿のみみかき買ひにけるかも

眠り猫ちいさくてあり彫刻のさだかならねど目凝らしみぬ

御廟(おん)の正面にあり守護の役を眠り猫なせりとか何故(なぜ)か諾(うべ)なふ

陽明門二十年前改装のありて見ずといふ妻と来たりぬ

陽明門がはしら渦巻きさかしまに彫らるるがあるところ撫でゆく

鳴き龍の天井にあり絵画(えが)かるる線は太しも打てば鳴き出づ

拍子木を打てば鳴き出づ鳴き龍のこゑをぞ五度われは聞きしか

参内の大名がたの居並びし敷き畳の格差おろそかならず

敷き畳一畳を下るごと十萬石の格差ありとぞ

富弘美術館の絵葉書

作者、星野富弘は中学教師なりしが体操中おちたりと聞く、手足不自由となりて、口に筆くわえ絵を描き言葉を添えぬ。言葉のやさしく、わかりやすく、ひとびとに問いかくるため人口に膾炙す。入場者、現在まで二百万人なりと。

帰りきて美術館の絵葉書を「やはり誰にも遣らない」と吾妻の言へり

初秋の空

鉄棒に背を反らしては仰ぎみる桜高木の木の間の空よ

あきぞらの蒼き眞澄のいろもみゆ鉄棒に倚り仰ぎゐたれば

あきぞらとなりゆくものか鉄棒によりても仰ぐさくら樹の間

湯殿山参拝　十月二十日

赤ら引く大き岩はも神ゐまし湯気立つ烟り拝み申す

赤羅ひくおほき岩肌しろき湯気けぶりたつ涯底ひ神在りましぬ

熱き湯のながるる岩に素足ひたし徑ゆく果てに銭を投げるも

地に落ちし銭は拾はず「銭踏む」の曽良が俳句を知りそめにけり

「谷ぞこに湧きいづる湯に神ゐまし」茂吉詠み給ふ貴くもあるか

ひと叢すすき

丘めぐりくだりきたればひと叢の芒白穂にあさひは差せり

朝日差す芒白穂のかがやきて銀にひかるを眼下にみる

あさひさすひとむらすすき穂のぎんにかがよふをみる丘くだりきて

枯れすすき白穂に朝日さし入りて銀に耀ふ霜月十日

佗助の花落つ

佗助が盛りしがままに落ちてある庭石のうへの幾つみつむる

佗助の落ちたる花を拾ひてはそのいきいきとしたる花はや

つばき科の佗助なればぽろり落つわれは不吉を思はざりけり

筒咲きの佗助のはな素々として白く咲きゆくすがた好めり

庭のさざんか　十一月二十七日

さざんかの桃いろの八重はな咲けばつぼみ幾百さきつぐならむ

幾年を庭のさざんか咲き満ちぬそのいきほひをわれはよろこぶ

天平ロマン館見学、黄金山神社参拝　十二月五日

さざれ石みづのながるる砂ぞこを掬ひては金を採るとこそきけ

水底の砂を掬ひて洗ひては黄金採りたる古へ思ほゆ

水底の砂を掬ひて洗ひおる先人がすがたかなしきろかも

天平のみ佛がみ膚ぬりこめむくがね献ぜしいにしへおもほゆ

陸奥国守百済王敬福が献ず黄金九百両のこと知らずてありき

年号を「天平感宝」と改むる聖武天皇かしこかりこそ

みほとけのくがねのひかりかがよふをこの世くにたみをろがみにけむ

黄金山神社に至る参道はみぎり谷川ひだり公園風にひろびろと
万葉集の歌碑などありたり。投書函あれば、孫の今野直人君の
早速、一句を投ぜり。
「弟とかいだんのぼり手をあわせる」　こんのなおと　七才

黄金山神社がながききざはしを弟とのぼる句をつくりたり

古川の大祖母　八十六歳になりませり　十二月七日夕

厨辺にピーマンの青き選び居る大祖母をしもわれはみまもる

帰りゆくわれに遣らむとピーマンの青きを選ぶ涙ぐましも

わが孫の真輝が呼びぬ「ピーチャン」の呼び名のふたり昼を過ごさむ

初霜ならむ　十二月十五日

この丘の西の斜面に上りきて今朝はも霜の初めて白し

身に沁みて寒き朝はもいちめんに丘の平らに霜は降りたり

雑草の刈られてひろき野となりし平らに置ける霜は白しも

折りに触れて

このいまのわたくしがいちばん仕合はせとあづまの言ふをききてゐたりき

われ七十五にて「動体視力　〇・八」なるは優れたりとぞ

蔓蔦のながきを巻きて輪となせるクリスマス飾り鈴も付けたる

あが妻の巻き蔓の輪に整ふる松の飾りを言ふこゑきこゆ

新潟の黄金餅なるかきもちを食ひては歌ふこがねむしのうた

平成十二年

直人、宇智、真輝、孫三人を連れて丘を一回り散歩す。
丘に上がりきて、宇智の言ふことばに驚く。一月三日ひる

西の丘孫三人とあがりきて宇智の言ふ「このけしきいつまでもみていたい」

絵手紙

鬼の面ユーモラスに描く絵手紙に闘病生活のことあるもかなしき

ホスピスの癌のあが背を支へつつ痛みなき日々をベスト尽くすと

名取市議の選挙ありて　一月二十一日夕

雪多にふりては融けしこの夕べ選挙運動のこゑの途絶えぬ

きんさんの一〇七歳にて眠るがごとく逝きませりとぞ。
一〇四歳の映像を拝見す。　一月二十三日

「宝もののありますか」問ふに答ふる「宝ものはない、ない、ない」
三たび宣らせ給ひき

ぎんさんの即ち告らす「宝ものはいのち、いのち」とぞきんさん促す

きんさんの諾ひたるかよくも見ず終はりしからに乏しきろかも

吾妻の丘畑にかきな摘みてはうぐゐすの鳴くを聞けりとぞ
興ありて作りしなり。

卯月はや中旬を過ぐ丘畑に春菜を摘めばうぐゐすの鳴く

のぼり来し笹叢あたりうぐゐすの継ぎても鳴くは楽しくぞあらむ

この丘に

朝はやもくるま運転の安全を呼ばふこゑする常なることども

この丘に「二十年前のお値段」とふ竿売りのこゑまた聞こえくる

孫たち来りては帰る　五月二日～四日、
夕べ雨の音大きくなれり。

「ポケモンスタジアムII」および「マントローラみどり」抱へたる面を嬉しむ

ブランコをうしろより押せば始まりぬ直人が空想のものがたりかな

空港に機を送りては土産店青磁湯呑の一対を買ふ

雨に濡るる石のいろよし傘さしてかへりしあとのさ庭べに立つ

悠久五千年ちちのみのちちの文おもひわれも来れり支那の大地に

高々と天安門が額のうへ幾本の赤旗なびきてありし

歩調正しく一隊の兵行進す若き面輪のおごそかなりし

故宮に向かふ城壁がもと貧しかる老人ふたり胡弓を引くも

自転車を片方に置きてあたま刈る床屋もありぬ城壁が下

二十余人皇帝の歩を運びしか永楽帝が龍のきざはし

つねにつねに側室三千の皇帝の朝は寝坊をしたりとぞ言ふ

天帝に五穀豊饒を祈念せる祭壇をしも天壇と謂ふ

祈年殿まろき三層の屋根を葺きあおきそらのなかくろぐろとみゆ

遠々き萬里の長城八達嶺燉台に立つあれとあがつま

急峻の石のきざはし手繋ぎてくだりてゆけり一足一足

九の数に仕切る石組み真中なるまろき石のうへ諸人立てり

偶数を喜ぶと覚ゆ中国に「九の数最高、八、六もよし」とガイドの言ふも

則天武后がみ代十層の大雁塔(だいがんとう)いま七層の聳え立つみゆ

手繋ぎて大雁塔の七層のきざはしのぼりめぐりてゆくも

塔のうへ西安のまち愛(うるは)しむ東西南北ますぐなるみち

西安の街角にしてひとすぢのながきみちみゆわが車窓には

行(ゆく)手見えず西安に至(いた)るこの道に黄砂(こうさ)のかぜは吹きても来るか

友を送る柳がもとの別れはや西安の広野(ひろぬ)ゆきゆくときに

芽吹きたるやなぎながるる車窓ゆく西安ひろぬえんえんとして

「皇帝さま」つねに使ひし西安の女人(にょにん)ガイドの片言(かたこと)なつかし

ゆたかなる西安が広野(ひろぬ)みささぎの丘のまろきをいくつあがみし

兵馬俑(へいばよう)みむとて急ぐこのわれに黄砂のかぜは吹きわたりくる

黄砂避けて塀に寄りたる若きらがをとこをみなもわれはみたりき

精緻(せいち)なる青銅の馬車あらはれて二千年はや夢(いめ)のごとしも

「青銅のチャンピョン」とふも諾(うべな)ひて造れる謎をおもひてみるも

砕かれし兵の面輪(おもわ)に顔料の朱(あけ)の残るを明かりは照らす

倒れたる兵の面輪に顔料の朱は残れり見下して出づ

楊貴妃が塑像しろけく立ちてある華清池のほとり妻を写しぬ

豊満の楊貴妃が肌おもはるるここの湯殿に湯はなかりけり

楊貴妃が美貌のゆゑに馬倒るまでに盡せし皇帝ありき

槐の木われも手触りし西安の華清池がほとり離れかゆかむ

鳥啼きて幾千のはな盛りたる虎丘が園に友を映さむ

虎丘まもる白き猛虎が伝説もまた愛剣三千本の行方も悲し

虎丘斜塔逆光がなかに聳えたるきざはしのぼるあれとあがつま

寒山寺鐘撞きて出づ街上に幾人も呼ばふ掛け軸掲げて

張継が「楓橋夜泊」の黒白の「月落」の二文字大きくみゆる

桐の木を囲ふ村落の風習もわが風景のなかに収めむ

上海の飯店にあり未だ見ぬ「峨眉山月の歌」吟じたりしか

この旅に「北京晴天」思ひ出で切り抜き捜すふた月を経て

紫禁城あかあかとして立てらくもおぼろとなれど恋しきろかも

豌豆の竹挿す　四月十八日

花冷えの風のふきくるおん祠さくら見上げぬ二分咲きならむ

いなり寿司つくりし妻とわが畑に花見をせんかさくらあらなくに

豌豆の手の竹挿さむわが切れる百本の竹挿してもゆくも

未だ手を欲しがらなくに竹挿しぬえんどうの蔓いつの日のびむ

昼飯(ひねいひ)を食(を)したるあとの昼寝かな差す陽やうやく暑くなりたり

丘のさくら散る　五月十日

隈もおちずさくらはなびら散り敷けるおん祠路となりてゐたるも

丘めぐりもどりきたれる公園のほそき鉄棒のはなびらいくつ

雨に濡るるさくらはなびら散りゆけばその幾(いく)ひらの鉄棒に付く

わが祈る祠天蓋のはなびらのすでに吹かれしくれなゐの萼(がく)

昨(きぞ)見てし天蓋(てんがい)の萼(がく)くれなゐのいろは褪(あ)せゐしひとつを取るも

さくらばなひと日ひと日のうつろひもすぎなむおかのはなびらをふむ

歌のおわりに

昭和六十三年に歌の編集を思い立つてから十二年の月日が過ぎ去つた。この間、ワープロも打つたが遅々として進まなかつた。これは懺悔するしかない。平成元年頃、体調を崩し半年ほど入院した時期があつたが、入院中は雑念なく歌に専念できたようである。それから五年後の平成六年、たまたま学生時代の新潟の友が入院しており、つれづれの慰めにもと、この時期の歌三十首余りを選び書き送つたことがある。友からの返書に「数々の短歌、心に触れるものばかりです」とあつた。このとき私はひどく感激したことを憶えている。率直に言つて歌の評価が嬉しかつたのである。後にも先にも批評はこのとき限りである。然して、この友もいまは亡い。

その後、旅の歌など細々と続くが寡作である。兎も角も歌は継続してゆかねばならなかつた。努力が足りなかつたのである。私の作歌は酷い添削癖があり

ストレートで作れることは先ずない。最初の歌は削つては加え、加えては削りして殆ど原形を留めない。これは原稿ノートを見れば分かる。「苦吟遅作」なのである。作歌上、ひとつだけ大切なことを述べるとすれば、やはり、「一首を流れるリズム」であろう。茂吉は歌の声調を重視したが、歌には自ずからなる韻律があるものである。

扨、平成十一年三月、胃のレントゲン写真に食道に影があり以前より悪いとの診断であつた。髭の殿下の寛仁親王は「癌を語る」のご本を出版なされたが、お読みするに食道癌は手術しても移転が早い。

親王が六回の手術に耐えられたことは奇跡であろう。ここに到り、遺言状を準備し好きな酒も慎み、歌集の完成を急いだのである。日々原稿をワープロに打ち続けることとなった。然して、六月十四日、四回目の検査の結果は「癌」ではなかつた。

このことがあつて、私はここ数年の歌の空白から立ち直るきつかけが出来たのである。このところの折々の歌のなかにいくつかの心に残る歌も作り得たの

である。また一度は行つてみたかつた東照宮と湯殿山の参拝も果すことができた。

扨、私事になるが、三人の子たちも、それぞれに家庭を持ち、孫は八人となつた。末娘が折々尋ねてくれ、孫と遊ぶのはたのしみであつた。

顧みれば月日の立つのは如何にも早い。子ら行きてより妻とふたりの生活ではあつたが、いまはこの生活に満足している。妻と二人して長生きしたいが、これだけは「神のみぞ知る」ことであろう。

菩提寺の大乗山法常寺の住職より、新年の挨拶状を拝受した。仏教の「小欲・知足」の教えより、欲張ることなく、片肘張らず、一日一日を精進努力する積み重ねの要を説かれた。この教えは、短歌にも通ずるところがあり、思いを新たに、ひと日ひと日の生きのいのちを大事にしたい。

歌集の終り頃には、一見たわいのない歌もある。然しこれが自分の自然体であり、分身なのである。何も高のぞみすることもない。短歌にも、それぞれの境界があるごとく、いまは私もこのあたりの境界に落ち着くのであろう。

この歌集一巻は、これからも、私の「こころの據りどころ」となるであろう。歌はありがたいものである。

尚、歌集を「冬日和」としたことについて、くどくなるが書き留めておきたい。昭和四十五年の私の作に「幾許のわが歌は生れむ冬日和む街に真白き日記帳買ふ」があり、また「冬日和む昼の日差しのゆたけくて古墳の坂を上りつめゆく」の二首がある。それで何時とはなしに「冬日」としたいとは思つていた。

最近、新聞の切り抜きを捲つていると、思いがけず、平成五年の読売新聞日曜版の「名画再読」のなかに「冬日」野口謙蔵（一九〇一～四四）の作品を見い出した。この時、不覚にも私は「とうじつ」と音読みにすることを知らなかつたのである。「ふゆび」と「とうじつ」では解釈に幅があるため、思いあぐねた末、改めて古語辞典の「冬日和」に據ることとした。辞典には、「冬のうららかに晴れた日、冬晴れ、冬うらら」とある。

私は冬の日のぬくもりが好きだからである。

平成十二年一月二十日　　満七十五歳の誕生日に

この素晴らしき名取が丘の
丘の上の祠に祈りつつ

伊藤英郎

歌集　冬日和

平成十二年十月二十八日　発行

著者　伊藤英郎

発行者　伊藤英郎

宮城県名取市名取が丘二丁目五―五

電話　〇二二―三八三―五七二二

印刷　笹氣出版印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町八―四五

電話　〇二二―二八八―五五五五